

# 研究成果報告書

(ふりがな) まつもり あきら

氏名 松森 昌

現職 山形県立加茂水産高等学校 教諭

平成3年度修了 教科・領域教育専攻 社会系コース

特別支援教育の考え方を取り入れた高校地歴・公民の授業実践

～高校3年間を通しての指導計画の開発～

「個人への対応に追われ、全体への指導がおろそかになる」。「うるさくなって、教師がいつも怒ってばかりだ」「数分も教師の話に集中できない。」「教師が話し始めると、途端に机にうつぶす。」など、本校では座学の一斉授業がなかなか浸透しない状況がある。その背景として、次の五点をあげることができる。①発達障がいと診断された生徒も含めて、全体として「学ぶ力」が不足している。そのために②義務教育段階の基礎的学力が身につけていないし、③学習全般に対して意欲を示さない場合もある。さらに④自尊感情（自己肯定感）が低く、⑤社会経験が乏しくなり、社会への関心が低く否定的になっている。

その一方で、高校段階で学習する「地理歴史・公民」（以下「地公」と略する）は、生徒たちにとって「難しい」教科である。まず、中学社会科に続く高校「地公」は、おとなが営んでいる社会を扱い、生徒たちにとっては身近なことではないからである。そして「地公」は「これまで」と「いま」の社会を学び「これから」の社会を考えさせる教科であり、さらに様々な要素が複雑に絡み合って成り立っているのが現実の社会である。教える方にしても手間がかかり、その分生徒たちにとっては複雑で難しい教科である。

一斉授業がなかなか浸透しない生徒たち全員が、この「地公」の内容をわかるようになるにはどうしたら良いのか。特別支援教育の視点から提唱された「授業のユニバーサルデザイン」の授業方法に注目した。小学校で社会科授業に取り組んでいる村田辰明氏は、社会科授業のユニバーサルデザイン（UDと略す）化の方法として次の六点をあげている。①授業目標や発問を具体的に「焦点化」、②資料や板書を見やすくしまたしかけをつくる「視覚化」、③子どもどうしの話し合いをすすめて個々の表現を豊かにする「共有化」、④学んだ見方・考え方を他の単元で使ってみる「スパイラル化」、⑤授業内容を動作で表現すること、⑥難易度の高くないところから授業や発問をはじめ「スモールステップ化」。

実は、そのUDの授業方法は、西川純氏、佐藤学氏、小林昭文氏、堀裕嗣氏、向山洋一氏、河村茂雄氏、有田和正氏などが義務教育の授業方法について様々提案していることと、ほぼ重なっている。

私の現任校とよく似た高校での「地公」の授業実践を集めた『授業づくりで変える高校の教室1社会』（井ノ口貴史、子安潤、山田綾編、2005年）でも、同様の授業方法が掲載されている。ただし、高校での実践である。義務教育の子どもたちとは違って学び方がわからず、「二次障害」的に学ぶ意欲が減退している生徒たち、しかし目前に大人がつくった社会が迫っている生徒たちへの実践である。その実践は目前の生徒たちの実態を踏まえた、現在の社会とのつながりをつくることを具体的な目標とする（「焦点化」）実践であった。

以上の研究を踏まえて、本校における「地公」の授業について、別紙のように、三年間の指導計画も含め、私なりにデザインし実践してみた。まだまだ「すべての生徒がわかる・できる」とまでいかないが、この一年間の「成果」として見ていただきたい。

## 《三年間の地理歴史・公民の指導計画》

### 1 重点目標

私たち人間たちが暮らしている、人間たちから構成されている社会に関心をもち、社会を見る方法や考え方、また社会とのつき合い方を学び、人間社会で生きる力をつける。

### 2 科目構成と単位数

1年 地理A（2単位）    2年 世界史A（2単位）    3年 現代社会（3単位）

### 3 授業方法

(1) 授業のルールを明確にする。

最初は、①教科書など必要なものを机の上に出す、②不必要なものはしまう、③服装をただす、などの授業をうける態度と心構えのルールからはじまり、ワークシートに書くためのルールや表現するためのルールをつくっていく。

(2) 単元や本時の目標を明確に示し、本時でのやるべきことを最初に明示する。

(3) 1時間の授業を「話を聞く時間」「書く時間」「話し合う時間」などに区切って、生徒たちが飽きない構成にする。

(4) 生徒どうしが話しあう時間をつくり、お互いに交流できるようにする。ただし、話しあうことが苦手な生徒の場合は、話しあうことを強制はしない。

(5) ワークシートに、本時のまとめを、さまざまな形で示せる(穴埋めや文章を書く、絵で表現する)ようにする。

(以上、参考資料 →ワークシート①～③を使用した指導計画例)

### 4 授業内容

(1) ひとりの教師が地理歴史・公民科目を三年間受け持つ、という立場を生かして、重点目標の実現のために、三年間の計画をつくる。

(2) 具体的には、「地理歴史・公民」科は人間たちがつくっている社会を学ぶのであるから、人間という生きものの本質を明らかにして、その人間たちは社会をどのようにしてつくってきたかを考察し（1学年から2学年にかけては自然環境との関係の中で、2学年から3学年にかけては世界各地で成立した諸地域世界の相互関係の中で）、その人間たちの工夫の結果である現代社会の特徴をつかむ。その現代社会のなかで、生徒一人ひとりが社会とどうつき合い、どう生きていくかを考える（きっかけをつくる）。

(3) このような流れのなかで、生徒たちの実態やクラスでの人間関係などを見ながら、生徒たちにとって何が学ぶに値する内容であるのかを具体的な指導内容や教材を考えていく。

(4) 人間についてや社会について理解しやがて表現するためには、文章を読む力を

つけないければならない。授業では、教科書の文章を中心に読むことをすすめていく。しかし、高校の「地理歴史・公民」の教科書は、専門用語が多く難解である。そこで、できる限り生徒たちの言葉に近いことばに「翻訳」したものも準備する。  
(参考資料 → ワークシート④、⑤)

- (5) 覚えることは、人間や社会について理解するために必要なことを中心（その例としてワークシート③を参照）とし、また、一般常識的な用語は、簡単にでも、触れるようにする。

\* 使用教科書『明解 新世界史A 新訂版』

	指導内容	学習内容	生徒の活動	ユニバーサルデザイン留意点
導入	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 授業準備の確認 服装・教科書等の準備</li> <li>2 始礼</li> <li>3 本時の学習内容について「東アジア世界での工夫」と板書する。</li> <li>4 本時の目標「東アジア世界では高度な知識・技術が生まれた」ことを話し、板書する。</li> </ol>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 服装を整え、教科書等を準備する。</li> <li>2 授業に向かう気持ちを整える。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 一度に複数の指示は行わない。</li> <li>2 大事な指示は、必ず言葉だけではなく、板書もする。</li> </ol>
展開①	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ワークシートを配布する。</li> <li>2 教科書『世界史A』8ページを開くことを指示する。</li> <li>3 1行め～11行めを読み、ワークシートの( )内に記入するように指示をする。</li> <li>4 右側の[まとめ]までするように指示をする。</li> <li>5 先日の自習時間に書いた、中国の地域ごとの食べもの分布図を黒板に添付する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 中国を中心とした「東アジア世界」の自然状況と、人びとがどのような食材を食べているかを確認する。</li> </ol> <p>同じ地域でも、異なる暮らし方をしていることを確認する</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ワークシートに、それぞれの生徒が、書き込む。</li> <li>2 黒板に添付した分布図を見て、確認する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>3 取組みの遅い生徒やわからない生徒へに個別に対応する。</li> <li>4 文字だけでは理解できない生徒に対して、彩色された地図を「見る」ことで、イメージをもつことができる。(理解へのサブルート)</li> </ol>
展開②	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ワークシート【設問】1について、黒板にヒントとなる文章を貼る。</li> <li>2 ワークシート【設問】2について、黒板にヒントとなる文章を貼る。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 (復習)異なるくらし方をしている人が近くにいる世界では、必ず商業や交易がさかんになる。</li> <li>2 (復習)商業・交易が盛んになり、人びとがたくさん往来すると、さまざまな知識や技術も交流する。</li> <li>3 その結果、さまざまな知識や技術が融合して、より高度な知識や技術が生まれる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 その文章の( )内に語句を入れながら声に出して読む。</li> <li>2 近くの人と相談して、答えを記入する。</li> <li>3 【設問】1の答えを発表する。</li> <li>4 ヒントを参考にして、近くの人と相談して、答えを記入する。</li> <li>5 【設問】2の答えを発表する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 黒板に「大きく書いた」文章を貼ることで、「書く」だけでなく「見る」ことで目から理解を深める手助けとなる。</li> <li>2 さらに「読む」ことで、耳からの理解を深めることができる。</li> <li>3 相談することで、お互いに確認することができる。</li> </ol>
まとめ	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 学習したことをまとめる。</li> <li>2 DVD『マルコ・ポーロ』を準備し、視聴する。(4分～10分)</li> <li>3 ワークシートの回収</li> <li>4 終礼</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 東アジアが高度な知識・技術を生み出したことを確認する。</li> <li>2 DVDから、その具体例を確認する。</li> </ol> <p>火薬、磁針、紙幣、針治療 カキ水</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 黒板を見て、学習内容をまとめる。</li> <li>2 DVDを鑑賞して、東アジアで生まれた高度な知識・技術の具体例をワークシートに記入する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 視聴覚教材を使用して、興味関心を高め、理解を深める。</li> </ol>

20

35

50

ワークシート ①～②

2	番	名まえ
---	---	-----

1.3 東アジア世界での工夫 (1)

『世界史A』8ページ1行め～11行め

東アジアは、( )・( )などの( )大陸東部と( )やベトナムなどからなる。中国北部のモンゴルなどの( )では( )、東北部の( )地帯では( )が営まれ、(雨量の )黄河流域では( )作が中心となり、小麦をはじめ、雑穀のあわ、きび、こりゃんなどが栽培される。一方、(雨の )長江流域やそれ以南、および( )・朝鮮半島南部など、モンスーン( )の影響を受ける地域では(水田 )が発達した。

歴史上、遊牧民や狩猟民はしばしば中国への侵入と支配を行ってきた。漢人が住民の多くを占める中国では、かれらに対抗するとともにその異文化を吸収しながら自らの文化を豊かなものにしてきた。こうして形成された( )や( )などの中国文化は、やがて周辺諸地域にも波及し、共通の文化要素をもつ東アジア文化圏を形成した。

ワークシート ①～②

[まとめ]

東	地域	雨は多い・少ない	人びとは何をしていますか？
ア	中国北部・ モンゴル	( )	( )
ジ	中国東北	( )	森林地帯 → ( )
ア	黄河流域	( )	( )作 → ( )、あわ、きび
	長江流域・ 日本・朝鮮半島南部	( )	稲作 → ( )

【設問】

1 (復習) このように東アジア世界には、米や小麦をつくる農業と遊牧という二つの異なるくらし方が存在しました。このようなところでは何が発達しましたか、まとめよう。


2 (復習) このような商業や交易が発展すると、たくさんの商人や遊牧民たちが、この地域を行き来することになり、さまざまな知識・技術も交流することになりました。その結果東アジアの知識や技術はどうなりましたか。

さまざまな知識・技術が融合して( )な知識・技術ができた。

3 ヨーロッパの人が驚いた！東アジア世界で生まれた知識・技術には、どのようなものがありましたか、DVDを見て、書き込もう。

--	--	--	--

ワークシート ③

人間がつくった社会を見ていくために必要な視点

『世界史A』教科書 32ページ9行め～11行め

この地域の人びとは、<sup>ちくさん</sup>畜産物と農作物を交換する必要もあって、  
早くから( )とその交易の場である( )が発達した。

商業・交易が発展すると、( )だけでなく、( )も  
たくさんつくられるし、( )も流通する。

しかし、( )の差が拡大する。

そして、さまざまな人たちが( )することになった。

『世界史A』教科書38ページ 7行め～12行め参照

さまざまな人たちと交流していけば、いろいろな( )・( )  
が融合され、そこで、より( )で、より( )な知識や  
技術が生まれる

3	番	名まえ
---	---	-----

15 現代社会のはじまり (6)

(2) 豊かなヨーロッパ世界の実際 (その1)

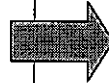
『世界史A』84ページから85ページ

(84ページ1行め～) 16世紀ころから、( )・( )  
 やスペインから独立した( )を先頭に、ヨーロッパ諸国は近代国家への道を歩みはじめた。……

(8行め～) かわって一定の( )と独立の( )をもつ国々が対等な外交関係で結びついた国際秩序( )体制が形成され、ヨーロッパ世界の新たなわく組みとなった。国家間の対立は、戦争を避けるため、日常的外交や条約、国際会議で調整されるようになった。……

(14行め～) イギリスは( )の時代に国教会【というイギリス独自のキリスト教会】を確立し、【貿易会社の】東インド会社の設立、北アメリカ植民地の開拓など体外進出を行い、発展の基礎を築いた。

(85ページ1行め～) フランスの( )は王を絶対的主権者とする( )の典型とされ、官僚制と常備軍を権力の柱とし、財政をささえるため輸出を重視する( )政策をおし進めるなど、君主が前面にたって自国内の政治的・経済的な一体性を追及した。他のヨーロッパ諸国も同様の政策を進め、体外進出を競い合った。



【解説】左の文を、わかりやすく書き直すと……

今から400年あまり前、( )・( )やスペインから独立した( )が最初となって、ヨーロッパでは「近代国家」が生まれました。

その「近代国家」とは「一定の( )」と「その国独自の( )」をもつ「主権国家」のことです。この「主権国家」がヨーロッパ各地にたくさんできましたが、その国家は、お互いに( )=平等の立場でしたので、何か国家間に争いが起きたときには、国家の代表が集まる国際会議が開かれ、その争いをなくそうとしましたし、争いが起きないように( )も結ばれました。

その主権国家ができた当時、その国家をまとめたのは国王(君主)でした。国王(君主)は、自分の国をまとめるために、誰からも邪魔されず自分で思ったとおりに何でもできる力、すなわち絶対的権力をもちました。このような国王を「絶対君主」といいます。絶対君主は、自分の意のままに働く家来、すなわち「官僚」と、自分の意のままに戦う「軍隊」(常備軍)を持ちました。そしてその官僚や軍人をやしなうために、ものを輸出してもうけようとする( )政策をすすめて、ヨーロッパ以外の世界に積極的に進出していきました。

その絶対君主として、イギリスの女王( )とフランスの王である( )をあげることができます。